



Number 29

June, 2025

和気藹々のひと

東京大学名誉教授 海老根 宏

内田能嗣さんと、のちに不幸な食い違いのせいで袂を分かった中岡洋さんという二人の飽くことを知らない探求精神の持主がいなかったら、日本における一九世紀の英国小説の研究は今とは随分違ったものになっていただろう。中岡さんはブロンテ姉妹に専念されたが内田さんはもっと関心が広く、ブロンテ姉妹、ジョージ・エリオット、ジェイン・オースティンの伝記を博搜し、彼女たちゆかりの場所を訪ね歩いて、これらの作者たちについて何でも知っている存在となった。そしてそのまわりに多くの人を集め、やがてそれがブロンテ協会、ジョージ・エリオット協会などとして開花することで、英国小説研究の先駆者として活躍されたのである。

内田さんの実り多い研究者人生を顧みると、何よりもその足まめなことに驚かされる。いわゆるブロンテ・カントリーを熱心に歩く人は大勢いるが、内田さんは彼女らの父ブロンテ牧師の故郷である北アイルランドの寒村まで足を延ばされた。内田さんはそこで地元の人びとと親しくなり、大いに歓迎されたというから、本当に人間関係を作り出す稀な能力の持主という他ない。同様に、ジョージ・エリオットが少女時代を送り、やがて『牧師生活情景』の舞台のモデルとなったミッドランドのいくつかの小村も限なく歩いておられる。そして、これらの地味な田舎生活の物語は、内田さんが語られる実在の村々を背景とすることで、立体的な現実感を得ている。

こうした豊かな経験は当然ながら人を集める。内田さんは英国やアイルランドの辺鄙な村や町の記憶やそこで育った作家たちについて情熱的に報告され、毎年のようにそれらの地方へのグループ・ツアーを組み、そこからこれらの作家の若き日々についての読書会、研究会、共同の翻訳のプロジェクトがはじまり、それがいくつもの学会、協会として育っていった。内田さんのモットーはいつも「和気藹々」であり、それがますます多くの人を集めて、これらの研究組織の創始者として慕われる大きな存在となられたのである。

私が内田さんのサークルに入ったのは、彼の熱心な誘いの結果であり、ブロンテ協会から始まって、彼が次々に設立する研究団体の恩恵を受けてきた。彼のように足まめ、交流まめでなく、デスクを前に動かずにいることの多い私の研究者人生は、内田さんとの幸運な出会いがなければ、今よりずっと貧弱なものだっただろう。こう思うと半生の和気藹々とした付き合いに対して感謝の気持を抱かずにいられない。内田さん、あなたのことを思うと、そこにはいつもあなたのこやかな笑顔が浮かんできます。あなただけでなく、あなたがもたらしてくれた多くの人たちとの交流もみな、あなたのお陰です。本当にありがとう。

内田能嗣先生のこと

和洋女子大学名誉教授 植松 みどり

ご訃報のお知らせをいただきました。とうとう先生もいらっしゃらなくなってしまったのですね。およそ5年ほど前、先生からのお年賀状には、奥様の病氣も快方に向かっていると書かれていました。やっと昔のような力強い先生にお目にかかると信じ、心待ちにしておりましたのに。

先生は、強靱な先導者、強い指導者として穏やかな英文学研究者たちを叱咤激励し、励まし続けていらっしゃいました。多くの企画、研究書出版や翻訳書出版、海外研修など、そのどれも、先生の強力な真剣な実行力のおかげで実現してきました。英文学界またジョージ・エリオット協会の会員はどれほど多くの新しい経験を味わえたことでしょうか。

先生はご自分が計画した企画に率先して参加され、当然だれもが参加するものと思い込まれて走って行かれます。ときに強引にことを進めますが、実は、即座に引っ込めることもあるのです。その塩梅がわからないときは先生は怖い存在でした。こちらは振り回されているように感じるときもあつたのですが、強く主張すると先生はあっさりと折れ、その度量の深さを見せていただいたこともあります。

実はその類いまれなる指導力に引っぱっていただき、ここまで来たような気がします。たくさん勉強もさせていただきました。心からの感謝を込めて、ご冥福をお祈りします。

内田能嗣先生とジョージ・エリオットの祝祭の時空

元近畿大学教授 清水 伊津代

内田能嗣先生のご逝去から六か月になる。深い寂しさの中で、内田先生のなされた大きなお仕事のことを考え、ご著書やエッセイを再読しながら過ごした。ジョージ・エリオットに限って挙げれば、緻密な高論集『ジョージ・エリオットの前期の小説』、多様な書き手を配された編著書『ジョージ・エリオットの時空』や『あらすじで読むジョージ・エリオットの小説』、エリオット研究の集大成的な『ジョージ・エリオット全集』の監修、晴れやかな祝祭のようだった日本ジョージ・エリオット協会の設立と『ジョージ・エリオット研究』の刊行、精力的なエリオット・カントリー・ツアーとツアー報告書の刊行等々。なんとすばらしいご業績を残されたことだろう。

そしてそのようなご偉業を偲んでいるとき、わたしの中に、エリオットが長詩「ジューバルの伝説」で描いた、あの幸福な始源の時の祝祭的ヴィジョンが立ち上った。そうだ、内田先生は始源世界のカインさんながらにみんなの中心でニコニコと笑い、先生の周りにはいつも「祝祭の最中」のようだった。内田先生はエリオット同様に「至福の〈公正さ〉」によって、経歴や出身校に関係なくわたしたちをエリオット研究の賑やかな世界に導き入れることを夢想されたに違いない。そうして祝祭的な「豊かな全体」や「美しい差異」の実現を垣間見せてくださったのだと、わたしも夢想する。内田先生、大切なことを学ばせてくださって、本当にありがとうございました。

内田能嗣先生を偲んで

兵庫教育大学名誉教授 大嶋 宏

日本ジョージ・エリオット協会の設立は、内田先生の尽力無くしてはあり得ませんでした。28年ほど前の1997年11月22日（ジョージ・エリオットの誕生日）に関西大学で、本協会の結成記念大会と総会が開かれ、海老根宏先生を会長とし、川本静子先生と内田先生を副会長、近藤いね子先生を顧問とする日本ジョージ・エリオット協会が誕生しました。発足時の会員は128名。本協会は好スタートを切ったのです。その前年の春に英国のジョージ・エリオットフェロウシップのセクレタリーを務めていたキャサリン・アダムズさんから日本支部設置の提案を受けた内田先生は、精力的に日本のフェロウシップの会員たちと連絡を取って話し合い、文字通り東奔西走して、日本支部を兼ねた「日本ジョージ・エリオット協会」の組織作りに邁進されました。かくして翌年の秋にようやく本協会が発足できたのです。誠に内田先生は優れたオーガナイザーでした。発足当時、事務局を引き受けていた私は英国本部のアダ

ムズさんと航空便で連絡を取り合いながら、慣れない事務的な仕事を進めていましたが、その際にも運営委員長を兼務されていた内田先生からの指示に大いに助けられました。あの頃のことを懐かしく思い返されます。

設立時から一貫して本協会を牽引されてきた内田先生のご逝去に、喪失感に打ちひしがれずにはいません。しかし、先生の尽力で設立された日本ジョージ・エリオット協会をさらに充実・発展させていくことが、後に残された私たちの使命だと考えています。

追悼・内田能嗣先生

元甲子園大学教授 富田 成子

初めて内田先生にお目にかかったのは、一九九三年日本英文学会中国四国大会で、先生が企画されたシンポジウム《『アダム・ビード』を読む》に講師の一人としてお声をかけて頂いた時です。口頭発表は初めてだったので非常に緊張したのですが、打合せの時から先生の周りには和やかなオーラが満ちており、自然体で乗り切れました。その後、九七年夏、突然G・エリオット協会が結成されるとお聞きした時の喜びは今も鮮明に覚えています。他作家の多くに学会がある一方で、エリオットには未だ無く心待ちにしていたのです。研究は基本的に一人で行うものですが、長期にわたり単独で研究・翻訳をしていると、大海を漂流しているような不安に駆られることがよくありました。同じ志を持つ研究者が集い切磋琢磨して高みを目指す協会の存在は、力強い指針が示されるようで素晴らしいと思いました。

先生と海老根先生のご尽力で協会が設立されて以降、私にも研究仲間の輪が広がり、「ニューズレター」等の興味深い活動が生まれました。内田先生の豊かな人脈と抜群の企画力により、『ジョージ・エリオット全集』をはじめとする研究書・翻訳書が次々と刊行され、単独では出来ない活動と執筆の場が多く、研究者に与えられました。穏やかな先生の周りにはいつも和やかな活気が溢れ、あの華やかだった傘寿の祝宴、記念論文集『文藝礼賛』の豪華さに、先生のご人徳とご造詣の深さが結晶しています。ご冥福を心よりお祈りいたします。

良きコンダクターとしての内田先生

京都大学国際高等教育院副教育院長 廣野 由美子

内田先生に初めてお会いしたのは、1994年、私が山口大学に就職した年の秋のことだった。高知大学で開催された日本英文学会中国四国支部大会で、『嵐が丘』についての研究発表をしたとき、フロアから質問してくださったのが内田先生だった。以後、内田先生から時々、電話をいただくようになった。『ヴィクトリア朝の小説——女性と結婚』という共著書を企画しているので、サッカーをテーマに書いてみないか。『ジョージ・エリオットの時空』という共著書を出すので、『ミドルマーチ』論を書いてほしい。ジュリエット・バーカー著『ブロンテ家の人々』の翻訳書を出すので、一章担当してほしい……等々、いつも突然お誘いくださる。私は、即答でお引き受けした。ことに若いときには、書くきっかけほど有難いものはないので、内田先生には、何にも代え難い貴重なチャンスをたくさんいただいたと、深く感謝している。

のちに、内田先生の企画された夏の研修旅行に参加させていただいたことも、忘れ難い思い出だ。2012年には「エリオット・カントリー・ツアー」、翌年には「ブロンテ・カントリー・ツアー」という形で、英文学の舞台をリアルに体験する機会をいただいた。そのおかげで、極度の方向音痴で出不精の私が、ようやく重い腰を上げて、イギリスの地に初めて踏み立つことができたのである。私個人にとっても、良きコンダクターであった恩人内田先生だが、もちろん公的にも、英文学界を牽引する強力なコンダクターでいらっしやったことは、言うまでもない。

■特別寄稿(1)

Coventry にて : George Eliot のコンサート、書籍、手稿楽譜ほか

元鹿児島国際大学教授 樋口 陽子

昨年 8 月 13 日に、日本ジョージ・エリオット協会事務局長中島正太先生からメール添付で送られた George Eliot Fellowship, Newsletter, August 24 の多くの楽しそうな企画の予告の中で、特に興味深い記事を見つけた。それは、11 月 16 日の晩にコヴェントリーの St. Mary's Guildhall で開催される“George Eliot: In Words and Music with Harriet Walter with an Orchestra of the Swan”であった。

願いが叶い、これを鑑賞した。David Le Page が企画・音楽監督である。舞台向かって左手に、Dame Harriet Walter が語り手として立ち、ジョージ・エリオットの小説や詩などを音楽に合わせて朗読する。舞台の右手では、SuRie が音楽に合わせてジョージ・エリオット作品からの抜粋を歌う。舞台後方では、ヴァイオリン、チェロ、コントラバス、オーボエ、打楽器、ピアノ各一名のオーケストラ the Swan が演奏した。

文学と音楽の合体というこのような試みは、日本では経験したことがなかったので、非常に感銘を受けた。各曲のタイトルはプログラムに載っていたが、勉強不足と英語力不足のために、どこから抜粋したのかが理解できなかったことが悔やまれる。

日本で予約できなかったので、Chair の Mr. John Burton がディナー付演奏会の券を予約購入してくださった。お蔭でバートン氏ご夫妻と一緒に最前列中央の席で鑑賞した。ご親切に厚く感謝申し上げる。

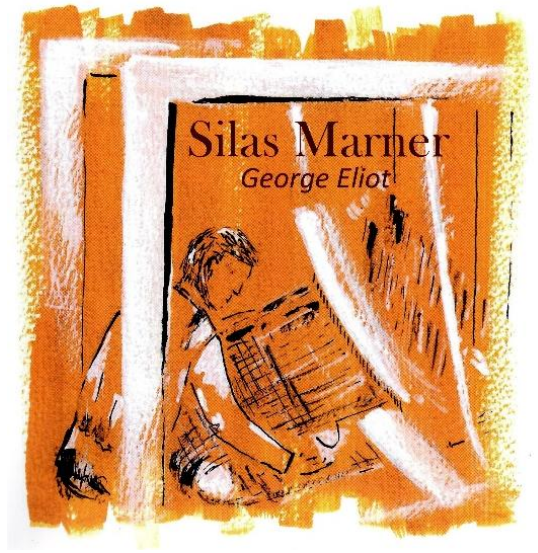
夕食のレストランで、Mrs. Vivienne Wood (Vice Chair)にお会いして、ご自身編纂の *Silas Marner*(2019)を、献辞付きで頂いた。この易しく書き改められた挿絵付きの 70 頁の本は、ウォリックシャー州の小学生全員に配布されたそうである。二日後に Haworth で読み、温かな配慮に満ちた児童向け文学書に感動した。(写真参照)

Viv は、以前 Nuneaton の King Edward VI College の副学長で、副学長室でお弁当を分けて下さったり、Mary Ann Evans の父親が差配人をしていた Arbury Hall をご案内頂いたり、いろいろ大変に親切にして頂いた。

私は『エドワード・ネヴィル』(彩流社、2011)を進呈した。この未完の短編は、Marianne Evans が 14 歳 (1834 年 3 月 16 日) の時の処女作である。*Edward Neville* が初めて印刷されたのは、Gordon S. Haight の伝記 *George Eliot: A Biography* (OUP, 1968)においてであったから、それまで読まれることはなかった。

訳書は Juliet McMaster ほか編、*Edward Neville* (Juvenilia Press, 1995)による。第 1 部の本文の訳者は、愚息樋口恒晴である。第 2 部は、主人公の伯父で、実在の国会議員の悪党であった Henry Marten について、囚われていた Chepstow 城、教会の墓石の銘詩、彼を一時期もてなした Sir Verner Mordaunt の St. Pierre の邸の廃墟などを、旧知の Mr. Richard Clammer と実地調査した記録である。ケムブリッジのクロムウェル博物館でも収穫があった。マリアンが利用したと思われる優れた書籍も、チェプストウの図書館で見つけた。例えば、William Coxe, *An Historical Tour in Monmouthshire* (London: T. Cadell, Jun and W. Davies, 1801)や、Sarah Barber, *A Revolutionary Rogue: Henry Marten and English Republic* (Sutton Publishing Limited, 2000)など。なお、*Edward Neville* には、先行研究もその後の研究もないと思われるので、レスター大学でのジョージ・エリオット大会 (2019) での口頭発表を纏めたもの、Akiko Higuchi, “George Eliot's Earliest Story: *Edward Neville* and Its Source Book” (Paul Davies, ed. *Still Crazy About George Eliot 200 Years Later*, 2019, pp. 118-126)も、ご参照頂ければ幸いである。

The Herbert Art Gallery and Museum には、George Henry Lewes が 1860 年代にジョージ・エリオットに贈った John Broadwood and Sons 製の 50 鍵のグランド・ピアノが展示されている。(写真参照)





18. A grand piano which George Henry Lewes presented to George Eliot in the 1860's. Herbert Art Gallery and Museum

この博物館には、Yehudi Menuhin がヴァイオリンを顎で支えている頭部と指板を抑えている左手首だけのいささか不気味な木造彫刻や、Diplodocus（愛称 Dippy）というアメリカ（ワイオミング州）で 1988 年に発見された後期ジュラ紀の全長 26 メートルののっぺりした馬面の巨大な骨格標本や、H.M.S. Coventry というフォークランド戦争で南大西洋沖合に沈んだ駆逐艦の模型もあった。当時、Andrew 王子は海軍のヘリ操縦士で、赤い薔薇を啜って、ニュースになった。

しかし最も大量にあったのは、The Statue of Lady Godiva 関連の絵画であった。実際の馬上の彫像は市内の広場にあるが、昼間はテントの売店に囲まれて、近づけない。夕方によく薄暗い写真を撮った。彼女と Peeping Tom に関する話は、良く知られていよう。不思議なのは、この町で、ゴディヴァのチョコレートが売られていないことだ。私はゴディヴァの小箱をお土産にした。

先年、Mrs. Lynda Burton がコヴェントリーのジョージ・エリオットの住まいへお連れ下さったが、今回は訪れるゆとりがなかった。

Nuneaton には、マリアン・エヴァンズが育った Griff House がある。現在は Premier Inn というホテルと、Beefeater というレストランになっている。私は何度か両方にお世話になった。

London の Savoy Hotel の近くの Strand 通りに面した建物に、一時期ジョージ・エリオットが住んだ。先年訪れて尋ねたが、会社のオフィスになっていた。彼女の終焉の住まいは、4 Cheyne（チェイニー）Walk で、門外から豪華な建物を眺めたことがある。

コヴェントリーでは、Holy Trinity Church（11 月 16 日は休み）と Coventry Cathedral に高い尖塔があり、これが歩く目印になる。この大聖堂は第二次大戦で外壁を残して破壊され、隣に新しく美しい聖堂が建てられた。ここで私は、初めて絵葉書を買った。

この町では、大きな文房具店でも、ホテルでも、カード類はあっても、絵葉書や葉書を売っていない。郵便局が葉書さえ売っていなかったのには驚いた。葉書を使う人がいなくなったからだそうである。

ジョージ・エリオットの手稿楽譜は 2 箇所所保管されている。主に讃美歌とピアノ曲である。これらについて、11 月 15 日に、バートン会長と、Anne Brontë's Song Book と Branwell Brontë's Flute Book を例示して、お話をした。ご関心のおありの方はいらっしゃいますでしょうか。

■特別寄稿(2)

出版に関するご報告

同志社大学嘱託講師 石井 昌子

拙著『ジョージ・エリオットのリアリズムと道德観』（彩流社、2014）は、エリオットの長編小説の初期作品から『ミドルマーチ』に至るまで（中期に一時的な停滞は見られるものの）リアリズムは進展し、その背景には、シンパシーに欠ける人物もシンパシーの対象に含めるという作者の道德観の成熟があることを論じています。さらに『ダニエル・デロンダ』には、従来指摘されてきた物語冒頭のフラッシュ・バック等以外に、語りの視点においてリアリズムからの逸脱が認められること、それは徹底的にシンパシーに欠ける人間という新たな人物造形に起因するもので、その背後にもエリオットの道德の基本としてのシンパシーへの信念が息づいていることを示しました。このたび、協会のご依頼により、出版までの経緯をご報告申し上げます。

私は京都大学法学部を卒業後、裁判官と結婚して専業主婦となり、夫の病死後に京都大学文学部に編入学、高校教員として英語教育に携わりました。ロンドン大学に留学し、教育学修士号を取得したのもこの時期です。家庭の事情により退職後、2012年に京都大学大学院文学研究科博士後期課程に編入学しました。しかし、英語学と英語教育学出身の私には文学の博士論文のまとめ方が分からず、課程修了後は非常勤講師として京都大学で英語を教えておりました。

その後、神戸大学国際文化学研究所博士後期課程に編入学し、定期的なコース指導とコロキウムに支えられ、ようやく3年間でエリオットのリアリズムが『ミドルマーチ』で最高峰に到達するまでを明示する論文をまとめることができました。この過程では、海外のジャーナルも大きな支えとなりました。

「ロザモンドにも結果的に夫に貢献している側面がある」という私の主張は、2022年の日本ジョージ・エリオット協会年次大会では不評を買いましたが、*The George Eliot Review*に投稿したところ、当時の編集長で現会長のDr. John Rignallより即座に受理の連絡を頂き、別の査読者からも「大変思慮深く興味深い議論である。他のメンバーもそう考えるだろう」との評価を頂戴しました。この経験は博士論文の完成へと向かう大きな励みとなりました。

『ダニエル・デロンダ』に関する第6章の執筆にあたっては、モダニズムの勉強が不可欠でした。そこで、2024年4月より京都大学大学院文学研究科の聴講生として、南谷泰良准教授の『ユリシーズ』演習に参加いたしました。毎回配布される充実した資料と丁寧なご指導により多くを学び、さらに拙稿にご助言を賜る機会にも恵まれました。こうして、索引作成を失念するなど不手際もございましたが、拙著は同年12月に刊行されました。

近年、シンパシー（共感）はエンパシーと呼ばれ、脳神経科学や人類学などの分野においても研究が進められています。エリオットの先見性を改めて実感するとともに、今後も一層の研究の深化が求められると感じております。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 日本ジョージ・エリオット協会 第27回全国大会報告 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 2024年12月21日(土) 成蹊大学8号館にて開催

■研究発表

結婚できない男たち

—ジョージ・エリオットとダイナ・クレイクの作品における「障害」の表象—

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程 星 志乃

本発表では、ジョージ・エリオットの『アダム・ビード』と『フロス河畔の水車場』における、身体に障害のある男性登場人物のジェンダーやセクシュアリティ、障害者の共同体内での立ち位置、および非障害者との関係について考察した（「障害」の表記については多様な議論があるが、ここでは障害学の慣例に従い「障害」を採用する）。障害のテーマに強い関心を持っていたダイナ・クレイク（Dinah Craik, 1826-87）の小説における男性障害者と比較することで、両作家の作品に共通する特徴が明らかとなつ

た。具体的には、男性障害者の性規範からの逸脱や性的魅力の欠如の描写、さらに恋愛の文脈からの排除と結婚の可能性の否定が見られる点である。一方で、障害者の共同体内での立ち位置や非障害者との関係には相違が認められた。エリオットとクレイクの評論を紐解くと、障害者表象の違いはそれぞれの作風や作家としての意識の違いを反映していると考えられる。エリオットの障害者表象からは、リアリズム作家として社会を忠実に描こうとする姿勢が読み取れるが、今後はヴィクトリア朝における障害者の実態に関する歴史的背景や史料を引き続き調査し、エリオット作品の史実に対する忠実性を検証していきたい。

■シンポジウム

19 世紀イギリス小説と医学・科学

本シンポジウムでは、医学、科学的テーマが含まれたエリオットの作品と 19 世紀イギリス小説、さらにはルイスの著書を取り上げ、当時の文学と医学・科学について考察した。ディケンズの「突発的人体発火」やジキル博士のハイド氏への変身は実際には非科学的な現象ではあるが、作家の完全なるイメージネーションのみとは言いきれないリアルな面が隠れている。この点に読者がひきつけられる要素がある。一方で、ルイスのように科学的正確性を作品に求める者もいて、様々な価値観が混在する中、医学・科学は 19 世紀小説における流れを変える重要なテーマであることをこのシンポジウムを通し、改めて認識することができた。各発表の概要は以下の通りである。 (矢野奈々)

■報告1

他者の心を科学できるのか—『ミドルマーチ』における「二組の夫婦の問題」
神戸女学院大学非常勤講師 佐藤 エリ

本発表では、ルイスの著作『精神と生命の諸問題』の『心理学の研究』（特に第4巻）を援用し、『ミドルマーチ』における2組の夫婦—ドロシアとカソーボン及びリドゲイトとロザモンド—の関係性を検証した。そこから、彼らの結婚生活において問題が生じた原因、ならびに個々の主観的な精神が他者を理解し得るのか、についてルイスとエリオットの考えを明らかにした。問題の原因は主に、ドロシアが自身の主観的な感情の影響により、カソーボンを客観的に捉えるのに失敗したこと、またリドゲイトがロザモンドの美しさを、内面を表す「客体」として同一視したことにあった。またロザモンドは、その自己中心的なものの見方により、他者の感情という客観的事実を自らの力によって可変する「客体」としてしまった。さらにリドゲイト夫妻の関係においては、独立した個人が、感情を共有しあう手段としての「言語」が適切に機能していなかった。しかしドロシアは、経験を通じて自らの感情のみにとらわれるのではなく、他者の内実を客観的に捉えるようになった。またそれがロザモンドにも波及し、ドロシアはリドゲイト夫妻の問題解決に貢献したのである。今後はエリオットの他の作品にも着目し、ルイスの心理学議論の影響がいかに変化したかについても考察したい。

■報告2

医者・科学者であるリドゲイトとジキル博士の心の均衡について
北里大学専任講師 矢野 奈々

本発表では、『ミドルマーチ』のリドゲイトと『ジキル博士とハイド氏』のジキル博士それぞれの心の均衡に焦点を当て、対極する心の出現と医者、科学者との関係性を考察した。

リドゲイトとジキル博士は研究目標の違いはあるが、二つの心の出現と善悪のコントラストによってそれぞれの心の均衡を保ち、医者として仕事を全うする姿は同じである。科学の発展により、医者は従来の勘に頼る治療から、顕微鏡や聴診器を用いた治療へと移行し、人間の複雑な内部と向き合うようになった。『ミドルマーチ』における「織布」「蜘蛛の巣」「網の目」といったイメージや、『ジキル博士とハイド氏』における一人の人間内の「相矛盾する独立した人格の集合体」は、いずれも人間の複雑性を象徴している。

電話（FAX）番号を初め、メールアドレスに変更が生じましたら、速やかに事務局までご連絡いただきますよう、お願い申し上げます（事務局のメールアドレス：georgeeliot.japan@gmail.com）。

なお、インターネットをご利用なさらない会員の方々には、郵便で各種資料の送付をしておりますが、こちらでも変更が生じましたら、事務局までご連絡ください。

事務局（2025 年 4 月 1 日より変更）：

〒760-8542 香川県高松市浜ノ町 8－5 3 徳島文理大学文学部 中島正太研究室内

日本ジョージ・エリオット協会事務局

協会設立 20 周年記念事業に関するご協力のお願い

本協会では設立 20 周年記念事業の一環として、テキスト・シリーズ「ジョージ・エリオットを原文で学ぼう」プログラムの発刊計画を進めています。

大阪教育図書のご協力のもと、第一巻、『サイラス・マーナー』教科書が、2017 年 12 月に刊行されました。会員の皆様におかれましては、今後も、大学や大学院その他の場で、是非、『サイラス・マーナー』教科書を採用していただきますよう、ご協力の程、よろしくお願いいたします。

また、協会では、第二巻『フロス河畔の水車場』教科書の 2025 年度刊行を目指しております。12 月の大会でお手にとってご覧いただき、こちらでもご購入もしくは 2026 年度使用教科書としての採用をご検討ください。

第 28 回全国大会について

2025 年 12 月 6 日（土）、龍谷大学（京都市伏見区深草塚本町 67）にて、第 28 回全国大会を開催いたします。当日は、研究発表、総会、シンポジウム、特別講演会、懇親会を予定しております。多数の皆様のご参加をお待ちいたしております。大会の詳細は 10 月に協会のホームページに掲載し、ご登録いただいているメールアドレスへお送りする大会プログラムでもお知らせいたします。経費節約のため、大会プログラムはホームページまたは添付ファイルよりダウンロードしていただきますようお願いいたします。また、大会のご出欠はメールでご案内しますオンライン出欠フォームをご利用いただきますよう、お願いいたします。なお、現在会員の方々（学生会員を除く）からも大会参加費をお 1 人 500 円いただくことになっております。協会の運営費確保のため、ご協力の程、お願いいたします。

第 28 回全国大会シンポジウム

ジョージ・エリオット：場所・移動・越境（仮）

- | | |
|-------|--|
| 講師 | 奥村真紀（京都教育大学教授）
“To call in many wanderers”—『アダム・ビード』における断絶と越境 |
| 講師 | 窪田憲子（都留文科大学名誉教授）
遥かなる場を求めて—『ロモラ』における＜移動＞ |
| 講師 | 迫田真帆（聖心女子大学非常勤講師）
『急進主義者フィーリクス・ホルト』における人とモノの移動 |
| 司会・講師 | 永井容子（慶應義塾大学教授）
境界線上の彷徨い：『ダニエル・デロンダ』を中心に |

シンポジウム要旨

19 世紀は、社会的・経済的・技術的変革により、人や物の物理的な移動が盛んになり、知識と情報が加速度的に進んだ時代である。新しい時代の息吹に触れることによって、社会の規範に帰属することを拒み、自身

の潜在的な欲求に目を向け、現実世界のしがらみからの解放や満たされざる夢の成就、あるいは未知なる世界との出会いを求めて移動を試みようとする者が後を絶たなかった。地域性すなわち場所の意識・記憶がかつて根強く存在していた地域社会において、その場所から移動することはどのような意味を持つのか。そして、何を求めて人々は境界を超えて既存のものからの脱却を試みるのだろうか。

本シンポジウムでは、エリオットの初期から後期までの作品を同年代の社会実態と照らし合わせながら、エリオットにとっての場所、移動、越境を様々な切り口から考察する。『アダム・ビード』(1859)は、地方農村社会の田園的生活を舞台にしているが、共同体からの逸脱や、疎外、追放によって社会的な枠組みを越境する存在も描かれている。奥村氏は、作中で“the poor wanderer”と評されるヘティ・ソレルを中心に、『アダム・ビード』における越境の意味を考える。ルネサンス期イタリアのフィレンツェを舞台にした『ロモラ』(1862-63)は、エリオットにとって、時間的、空間的にもっとも遠い場所に物語の舞台を設定した作品である。窪田氏は、本作品が19世紀中葉に盛んになってきた＜移動＞というイギリスの社会現象とどのような関わりがあるのかを探る。迫田氏は、『急進主義者フィークス・ホルト』(1866)において、所有物の移動が物語の鍵を握るとし、小説に描かれる生活用品とそれらを製造する職人らに焦点を絞りながら、場所、移動、越境の諸相を、19世紀物質文化を通して探る。そして、永井は、外的および内的な移動や社会的境界の横断が、何かの目的を達成するための手段ではなく、それ自体が目的を持つ行為であることをエリオットの最後の小説『ダニエル・デロンダ』(1876)を用いて考察する。彷徨いが、エリオットが行き着く場所であり、彼女が当時の政治的・公的言説と向き合い、折り合いをつける一手段であった可能性を探る。(永井容子)

第28回全国大会特別講演のご案内

本年度の特別講演には、福永信哲先生(岡山大学名誉教授)を講師としてお招きします。日本ジョージ・エリオット協会会長(2018~21年度)を経て、現在理事。著書に『絆と断絶 ジョージ・エリオットとイングランドの伝統』(松籟社、1995年)、『ジョージ・エリオットの後期小説を読む—キリスト教と科学の葛藤—』(英宝社、2016年)他、多数の共著、論文を発表。2024年3月には大著『ミドルマーチ』(上・下巻)の新訳が彩流社から出版されたばかりです。今回の特別講演のタイトルは「ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』ディスコースに見るインターテクスチュアリティ——語りの声に息づく時代精神との対話——」です。皆様、奮ってご参加ください。

講演要旨

『ミドルマーチ』ディスコースに見るジョージ・エリオットの達意の言語感覚には、具体的状況にある人間の心の動きを捉える明敏な想像力がある。その難解な英語を読む者は、言葉の背後に広がる余韻の深さ、情緒の豊かさに触れて、苦労が報われ、喜びを感じる。その所以は、彼女の宗教、哲学、神話の知識と相並んで、生理学・心理学の知見が人間洞察となって生きているからである。彼女は古典の先達や同時代の主だった精神と対話し、その鋭い歴史感覚を情景描写や人物描写にそっと生かしている。そこに作家の到達した“Religion of Humanity”の境地が反映している。その一端を挙げれば、聖書、スピノザ、フォイエルバッハ、チャールズ・ダーウィンなどの影響がテキストの端々に覗いている。その影響関係を、具体的なテキストを取り上げて、言語事実に即して論じる。(文責：福永 信哲)

第28回全国大会研究発表者の募集

発表テーマ： ジョージ・エリオットに関連したもの 発表者数： 1~2人(予定)

応募資格： 日本ジョージ・エリオット協会会員 応募締切： 7月25日(金)

発表時間： 30分(発表25分、質疑応答5分)時間厳守でお願いいたします。

レジュメ： ワープロA4版で、約400字程度。発表題目には、英文名も添えてください。

※ 原稿には、氏名・住所・所属・電話番号・メールアドレスを明記してください。

宛先： 〒760-8542 香川県高松市浜ノ町8-53 徳島文理大学文学部 中島正太研究室内

日本ジョージ・エリオット協会事務局/E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com

応募は郵送、またはメールで、お申し込みください。応募者多数の場合は、調整させていただきます。

※ 本協会は、学生会員の研究活動を支援し、研究発表を奨励しております。学生会員が発表を希望する場合は、発表のレジュメに指導教員の推薦文（書式自由）を添え、7月25日までにメールにて事務局にお送りください。

2026年度『ジョージ・エリオット研究』第28号への投稿論文募集

2026年11月に発行予定の学会誌『ジョージ・エリオット研究』第28号の投稿論文の締め切りは2026年4月1日（水）厳守です。奮ってご応募ください。投稿規定およびチェックシートは、協会のホームページ（<https://www.g-eliot.com/ronshu>）からダウンロードすることができますので、必ずご参照ください。論文の他にも書評を募っておりますので、新刊書などの書評をご希望される方は、編集委員長の新野緑先生、もしくは事務局まで、お早めにお申し出ください。

会費納入のお願い

会費納入につきまして、お願いいたします。年会費および振込先は、以下の通りです。

一般会員	7,000 円（国内会費 5,000 円と英国本部会費 2,000 円）
英国本部に登録された終身会員	5,000 円（国内会費のみ）
学生会員（大学院生、学部生など）	2,000 円（本部会費を含む）

■振込先1（郵便振替口座）：00960-0-105579 日本ジョージ・エリオット協会

■振込先2（銀行振込扱い）

銀行名：ゆうちょ銀行

支店番号（3桁）：099 *店名が〇九九（ゼロキュウキュウ）となります。

預金種目：当座

口座番号（7桁）：0105579 日本ジョージ・エリオット協会

*振込先1・2いずれも、手数料はご負担いただいております。

*振込先2の場合、ゆうちょ銀行以外の金融機関からもATMで送金ができます。

なお、事務処理の都合上、9月末までにお振込をいただきますよう、ご協力をお願いいたします。ご承知の通り、本協会は英国ジョージ・エリオット・フェローシップの支部をかねており、毎年1月に英国本部に会費を送金しております。会費納入が年を越しますと、本部への送金に間に合わず、本部からの郵送物が受け取れなくなります。また、退会につきましてもお申し出がない限りは、遡って未納分の会費を納入していただくこととなっておりますので、くれぐれもご注意ください。

新入会員の確保について

現在、本協会は、一般会員62名、終身会員10名、学生会員4名、合計76名となっております。年々数名の会員が加入される一方で、退会される会員もおられ、全体として会員数は漸減傾向にあります。100名を切る状態が続きますと、日本学術会議から協力学術研究団体としての認定を受けられなくなる可能性がありますので、会員の皆様におかれましては、新入会員確保にご協力を賜りますようお願いいたします。この問題に関するご意見等がございましたら、事務局までお知らせください。

事務局夏季閉鎖のお知らせ

例年にならい、夏季休暇のため8月1日から8月31日まで、事務局を閉鎖いたします。緊急のご連絡は、事務局中島正太のメールアドレス（nakajima@kgw.bunri-u.ac.jp）宛てをお願いいたします。

👉新刊書等のご案内👈

- ★ 石井昌子『ジョージ・エリオットのリアリズムと道徳観』（彩流社、2024 年 12 月）。エリオットの 6 つの長編小説のうち『ミドルマーチ』までのリアリズムの通時的進展（中期における停滞を含む）と最後の作品『ダニエル・デロンダ』におけるリアリズムからの逸脱を指摘し、その原因が作者自身の道徳的成熟（シンパシーの対象の拡大）と『ダニエル・デロンダ』における新たな人物造形にあることを、テキストの精読と時代背景の正確な把握から論じた書です。
- ★ ジョージ・エリオット、小尾芙佐（訳）『フロス河の水車小屋』（上・下）（白水社、2025 年 3 月）。*The Mill on the Floss* の新訳が出ました。プロの翻訳家の訳でスラスラと読めますし、携帯に便利です。ただ注釈はありません。

＜お願い＞ ジョージ・エリオットに関する新刊等の情報を事務局までお寄せください。

[illegible]

2025年5月9日放送のBBC ニュースで、ロンドン〜マンチェスター間をつなぐ高速鉄道路線（HS2）の進捗状況が伝えられました。北ウォリックシャーのウォーター・オートン（Water Orton）からバーミンガムのウォッシュウッド・ヒース（Washwood Heath）への道が開けたとのこと。なんと、その突貫工事に使われた機械の名前が Mary Ann！ウォリックシャーを代表する作家である彼女の名前にちなんだそうです。このインタビューに答えるのがエリオットさん（つづりは Elliot）とジョシュ・チャップマンさん（Josh Chapman、惜しい！）でした。（<https://www.youtube.com/watch?v=Fbf8iDIpH5w>）偶然なのか、意図的なのか、George Eliot を研究する者として反応せざるを得ない面白いニュースでした。お忙しい中、執筆にご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。また、長年にわたり本協会でご尽力くださった内田能嗣先生の御冥福をお祈り申し上げます。先生のご著書によって、私の George Eliot への道が開けました。（編集：濱 奈々恵）

George Eliot Newsletter of Japan 第 29 号

発行者 日本ジョージ・エリオット協会

代 表 廣野 由美子

編 集 濱 奈々恵

事務局 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

〒760-8542 香川県高松市浜ノ町8-53

TEL 087-899-7152 (直通)

E-mail georgeeliot.japan@gmail.com

Homepage <https://www.g-eliot.com/>

振替口座番号 00960-0-105579

発行日 2025年6月1日